

なぜ私がドン・キホーテ?④



小学校の学芸会でサンチョ役を演じて第1回の掲載にあたり、編集担当の方が私のプロフィールをホームページからずいぶん大きく紹介してくれました。連載のタイトルを含め、なぜ私が「東京のドン・キホーテ」を自称しているのか、関心を持っていらっしゃる読者の方もいるかと思いますが。本来、この連載はラテン・アメリカの文化事情や人間の生き方に関するエピソードを紹介していくのを趣旨としていますが、その前に一度「ドン・キホーテ」の由来についてお話しておきたいと思います。



ドン・キホーテとサンチョ・パンサの像の前で

それは小学校の6年生までさかのぼります。学校の学芸会に、クラスで「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がサンチョ・パンサの役を演じたのがきっかけでした。以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて、少年向けの本を、大人になってからは全訳本を通読したものでした。

また10年ほど前、職場の近くにある日本スペイン協会で、スペイン文学の権威・長南実先生による原書の勉強会がありました。何とか時間をやりくりして、週一回、一年余り出席。さらに、松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も東京で何回も観劇しました。

ドン・キホーテもですが、サンチョ・パンサの言葉もいいですね。

「人間寝てえるうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」
(永田寛定訳)

「この世を捨て、地の下へもぐる段になったら、お大名も日雇もおんなじように窮屈な途を歩くだし、法王様のからだも聖器番のからだも、よしんば背たけに違いはあろうと、占める広さに変わりはねえ」(同)

.....

二人の間でやりとりされる諺は、実に示唆に富んでいます。お金や地位や名誉に支配されがちな人間の性を鋭く突いています。正義を求め、悪と戦うために槍を抱えて風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化とも言えるでしょう。

セルバンテスは58歳のとき前編を、68歳のときに後編を書き上げました。その初版本が1605年にマドリッドで出版されたのです。悲壮なドン・キホーテと優柔なハムレット。セルバンテスが亡くなったのは奇しくもシエクスピアと同じ1616年でした。作品は近代西洋文学の原点ともなり、聖書に次いで世界で多くの言語に翻訳されています。物語は長編ですがわかりやすく面白い。しかしながら、それをどの程度深く理解できるかは、読者の成熟の度合いにかかっているととも言われています。



ラ・マンチャの遠景

一昨年は作品の出版からちょうど400年にあたり、スペインの各地で記念の行事が催されました。そこで、自称「東京のドン・キホーテ」は、やはり定年退職したばかりのカメラマンをサンチョ・パンサに見立て、飛行機に乗って現地に飛んだのです。旅のテーマは「あなたの“見果てぬ夢”は何ですか?」。今回は、定年退職の熟年男二人の“ラ・マンチャ道中膝栗毛”についてご報告しましょう。

